

離魂病

岡本綺堂

青空文庫

M君は語る。

これは僕の叔父から聴かされた話で、叔父が三十一の時だとい
うから、なんでも嘉永の初年のことらしい。その頃、叔父は小石
川の江戸川端えどがわぼたに小さい屋敷を持つていたが、その隣り屋敷に西岡
鶴之助という幕臣が住んでいた。ここらは小身の御家人ごけにんが巢を作
っているところで、屋敷といつても皆小さい。それでも西岡は百
八十俵取りで、お福という妹のほかちゅうげんに中間一人、下女一人の

四人暮らしで、まず不自由なしに身分だけの生活をしていた。西岡は十五の年に父にわかれ、十八の年に母をうしなつて、ことははたち二十歳のひとりもの独身者である。——と、まず彼の戸籍しらべをして置いて、それから本文に取りかかることにする。

時は六月はじめの夕方である。西岡は下谷したや御徒町おかちまちの親戚をたずねて、その帰り途に何かの買物をするつもりで御成道おなりみちを通りかかると、自分の五、六間さきを歩いている若い娘の姿がふと眼についた。

西岡の妹のお福は今年十六で、瘦形の中背の女である。その娘の島田に結っている鬢びん付きから襟元から、四入よついり青梅おうめの単衣ひとえものをきている後ろ姿までがかれと寸分も違わないので、西岡はすこ

し不思議に思った。妹が今頃どうしてここらを歩いているのであろう。なにかの急用でも出しゅつ来たいすれば格別、さもなくば自分の留守の間に妹がめつたに外出する筈がない。ともかくも呼び留めてみようと思つたが、広い江戸にはおなじ年頃の娘も、同じ風俗の娘もたくさんある。迂濶に声をかけて万一それが人ちがいであつた時には極まりが悪いとも考えたので、西岡はあとから足早に追いついて、まずその横顔を覗こうとしたが、夏のゆう日がまだ明るいので、娘は日傘をかたむけてゆく。それが邪魔になつて、彼はその娘の横顔をはつきりと見定めることが出来なかつた。さりとて、あまりに近寄つて無遠慮に傘のうちを覗くことも憚はばられるので、西岡は後になり先になつて小半町ほども黙つて跟ついてゆ

くと、娘は近江屋という暖簾のれんをかけた刀屋の店先に足をとめて、内をちよつと覗いているようであつたが、又すたすたと歩き出して、東側の横町へ切れて行つた。

「つまらない。もうよそう。」と、西岡は思つた。

それがほんとうの妹であるか無いかは、家へ歸つてみれば判ることである。夏の日が長いといつても、もうだんだんに暮れかかつて来るのに、いつまで若い女のあとを追つてゆくでもあるまい。物好きにも程があると、自分で自分を笑いながら西岡は爪つまさき先さきの方向をかえた。

江戸川端の屋敷へ歸り着いても、日はまだ暮れ切つていなかつた。庭のあき地に植えてある唐もろこしの葉が夕風に青くなびい

ているのが、杉の生垣いけがきのあいだから涼しそうにみえた。中間の佐助はそこらに水を打っていたが、くぐり戸をはいって来た主人の顔をみて会えしやく釈した。

「お帰りなさいまし。」

「お福は内にいるか。」と、西岡はすぐに訊いた。

「はい。」

それではやはり人ちがいであつたかと思ひながら、西岡は何げなく内へ通ると、台所で下女の手伝いをしていたらしいお福は、襷たすきをはずしながら出て来て挨拶した。毎日見馴れている妹ではあるが、兄は今更のようにその顔や形をじつと眺めると、さつき御成道で見かけたかの娘と不思議なほどに好く似ていた。やがて湯

が沸いたので、西岡は行ぎょうずい水をつかつて夕飯を食ったが、そのあいだもかの娘のことが何だか気になるので、下女にもそつと訊いてみたが、その返事はやはり同じことで、お福はどこへも出ないというのであった。

「では、どうしても他人の空似か。」

西岡はもうその以上に詮議しようとはしなかった。その日はそれぎりで済んでしまつたが、それから半月ほどの後に、西岡は青山百人町の組屋敷にいる者をたずねて、やはり夕七つ半（午後五時）を過ぎた頃にそこを出た。今と違って、そのころの青山は狐や狸の巢かと思われるような草深いところであつたが、それでも善光寺門前には町家がある。西岡は今やその町家つづきの往来へ

差しかかると、かれは俄かにぎよつとして立停まった。自分よりも五、六間さきに、妹と同じ娘があるいていたのであつた。見れば見るほど、そのうしろ姿はお福とちつとも違わないのである。おなじ不思議をかさねて見せられて、西岡は単に他人の空似とばかりでは済まされなくなつた。

彼はどうしてもその正体を見定めなければならぬような氣になつて、又もや足を早めてそのあとを追つて行つた。このあいだもきょうも、夕方とはいつても日はまだ明るい。しかも町家つづきの往来のまん中で、狐や狸が化かすとも思われぬ。どんな女か、その顔をはつきりと見届けて、それが人違いであることを確かめなければ何分にも氣が済まないの、西岡は駈けるように急

いでゆくと、娘はきょうも日傘をさしている。それが邪魔になつてその横顔を覗くことが出来ないの、かれは苛々いらいらしながら付けてゆくと、娘はやがて権田原につづく広い草原に出た。ここは草深いが中にも草深いところで、夏から秋にかけては人も隠れるほどの雑草が高く生い茂っていて、そのあいだに唯ひと筋の細い路が開けているばかりである。娘はその細い路をたどつてゆく。西岡もつづいて行つた。

「人違いであつたらば、あやまるまでのことだ。思い切つて呼んでみよう。」

西岡も少しく焦れて来たので、ひとすじ道のうしろから思い切つて声をかけた。

「もし、もし。」

娘には聞えないのか、黙って俯向いて足を早めてゆく。それを追いながら西岡は又呼んだ。

「もし、もし。お嬢さん。」

娘はやはり振向きもしなかったが、うしろから追って来る人のあるのを覚つたらしい。俄かに路をかえて草むらの深いなかへ踏み込んでゆくので、西岡はいよいよ不思議に思った。

「もし、もし。姐ねえさん……お嬢さん。」

つづけて呼びながら追つてゆくと、娘のすがたはいつか草むらの奥に隠れてしまった。西岡はおどろいて駆けまわって、そこらの高い草のなかを無暗に掻き分けて探しあるいたが、娘のゆくえ

はもう判らなかつた。西岡はまったく狐にでも化かされたような、ぼんやりした心持になつた。そうして、なんだか急に薄気味悪く、なつて来たので、早々に引返して青山の大通りへ出た。

家へ歸つて詮議すると、きょうもお福はどこへも出ないというのである。お福には限らず、そのころの武家の若い娘がむやみに外出する筈もないのであるから、出ないというのが本当でなければならぬ。そうは思いながらも、このあいだといい、きょうといい、途中で出逢つたかの娘の姿があまりお福によく似ているということが、西岡の胸に一種の暗い影を投げかけた。その以来、かれは妹に対してひそかに注意のまなこを向けていたが、お福の挙動に別に変つたらしいことも見いだされなかつた。

二

西岡は一度ならず二度ならず、三度目の不思議に遭遇した。

それはあくる月の十三日である。きようは盂蘭盆の入りであるというので、西岡は妹をつれて小梅の菩提寺へ参詣に行った。残暑の強い折柄であるから、なるべく朝あさ涼すずのうちに行つて来ようというので、ふたりは明け六つ（午前六時）頃から江戸川端の家を出て、型のごとくに墓参をすませて、住職にも逢つて挨拶をして、帰り途はあずま橋を渡つて浅草の広小路に差しかかると、盂蘭盆であるせいも、そこらはいつともより人通りが多い。その混雑

のなかを摺りぬけて行くうちに、西岡は口のうちであつと叫んだ。妹に生き写しというべき若い娘の姿が、きようも彼の眼先にあらわれたからである。

西岡はあわてて自分のうしろを見かえると、お福はたしかに自分のあとから付いて来た。五、六間さきには彼女と寸分違わない娘のうしろ姿がみえる。妹が別条なく自分のあとに付いている以上、所詮かの娘は他人の空似と決めてしまふよりほかはなかつたが、いかになんでもそれが余りによく似ているので、西岡の不審はまだ綺麗にぬぐい去られなかつた。かれは妹をみかえつて小声で言つた。

「あれ、御覧、あの娘を……。おまえによく似ているじゃあない

か。」

扇でさし示す方角に眼をやつて、お福も小声で言った。

「自分で自分の姿はわかりませんが、あの人はそんなにわたしに似ているでしょうか。」

「似ているね。まったく好く似ているね。」と、西岡は説明した。

「しかもきょうで三度逢うのだ。不思議じゃあないか。」

「まあ。」

とは言ったが、お福のいう通り、自分で自分の姿はわからないのであるから、かの娘がそれほど自分によく似ているかどうかを妹はうたがっているらしく、兄がしきりに不思議がつているほどに、妹はこの問題について余り多くの好奇心を挑発されないらし

かった。

「ほんとうによく似ているよ。お前にそっくりだよ。」と、兄はくり返して言った。

「そうですかねえ。」

妹はやはり気乗りのしないような返事をしているので、西岡も張合い抜けがして黙ってしまったが、その眼はいつまでもかの娘のうしろ姿を追っている、やっこ奴うなぎの前あたりで混雑のあいだにその姿を見失なった。きようは妹を連れているので、西岡はあくまでもそれを追って行こうとはしなかったが、二度も三度も妹に生き写しの娘のすがたを見たということがどうも不思議でならなかった。

その晩である。西岡の屋敷でも迎え火を焚いてしまつて、下女のお霜は近所へ買物に出た。日が暮れても蒸し暑いので、西岡はきりこどうろう切子燈籠をかけた縁先に出て、しずかにうちわ団扇をつかつていると、やがてお霜が帰つて来て、お嬢さんはどこへかお出かけになりましたかと訊いた。いや、奥にいる筈だと答えると、お霜はすこし不思議そうな顔をして言った。

「でも、御門の前をあるいておいでなすつたのは、確かにお嬢さんでございましたが……。」

「お前になにか口をきいたか。」

「いいえ。どちらへいらつしやいますと申しましたら、返事もなさらずに行つておしまいになりました。」

西岡はすぐに起^たつて奥をのぞいて見ると、お福はやはりそこにいた。彼女は北向きの肱掛窓に寄りかかつて、うとうとと居眠りでもしているらしかった。西岡はお霜にまた訊いた。

「その娘はどっちの方へ行つた。」

「御門の前を右の方へ……。」

それを聞くと、西岡は押取^{おつとりがたな}刀で表へ飛び出した。今夜は薄く曇っていたが、低い空には星のひかりがまばらにみえた。門前の右どなりは僕の叔父の屋敷で、叔父は涼みながらに門前にたたずんでいると、西岡は透かし視て声をかけた。

「妹は今ここを通りやあしなかつたかね。」

「挨拶はしなかつたが、今ここを通つたのはお福さんらしかった

よ。」

「どっちへ行つた。」

「あっちへ行つたようだ。」

叔父の指さす方角へ西岡は足早に追つて行つたが、やがて又引つ返して来た。

「どうした。お福さんに急用でも出来たのか。」と、叔父は訊いた。

「どうもおかしい。」と、西岡は溜息をついた。「貴公だから話すが、まったく不思議なことがある。貴公はたしかにお福を見たのかね。」

「今も言う通り、別に挨拶をしたわけでもなし、夜のことだから

はつきりとは判らなかつたが、どうもお福さんらしかつたよ。」
「むむ。そうだろう。」と、西岡はうなずいた。「貴公ばかりでなく、下女のお霜も見たというのだから……。いや、どうもおかしい。まあ、こういうわけだ。」

妹に生きうつしの娘を三度も見たということをや西岡は小声で話した。他人の空似といつてしまえばそれ迄のことであるが、自分はどうも不思議でならない。殊に今夜もその娘が自分の屋敷の門前を徘徊していたというのはいよいよ怪しい。これには何かの因縁がなくてはならない。と思つて、今もすぐに追いかけて行つたのであるが、そのゆくえは更に知れない。今夜こそは取つ捉まえて詮議しようと思つたのに又もや取逃がしてしまつたかと、かれ

は残念そうに言った。

「むむう。そんなことがあつたのか。」と、叔父もすこしく眉をよせた。「しかしそれはやっぱり他人の空似だろう。二度も三度も貴公がそれに出逢つたというのが少しおかしいようでもあるが、世間は広いようで狭いものだから、おなじ人に幾度もめぐり逢わないとは限るまいじゃないか。」

「それもそうだが……。」と、西岡はやはり考えていた。「わたしにはどうも唯それだけのことは思われぬ。」

「まさか離魂病というものであるまい。」と、叔父は笑つた。

「離魂病……。そんなものがある筈がない。それだからどうも判らないのだ。」

「まあ、詰まらないことを気にしない方がいいよ。」

叔父は何がなしに気休めをいつているところへ、西岡の屋敷から中間の佐助があわただしく駈け出して来た。かれは薄暗いなか
に主人の立ちすがたをすかし視て、すぐに近寄つて来た。

「旦那さま、大変でございます。お嬢さんが……。」

「妹がどうした。」と、西岡もあわただしく訊きかえした。

「いつの間にか冷たくなつておいでのようで……。」

西岡もおどろいたが、叔父も驚いた。ふたりは佐助と一緒に西岡の屋敷の門をくぐると、下女のお霜も泣き顔をしてうろうろしていた。お福は奥の四畳半の肱かけ窓に倚りかかたままで、眠り死にとでもいうように死んでいたのであった。勿論、すぐに医

者を呼ばせたが、お福のからだは氷のように冷たくなつていて、再び温かい血のかよう人にならなかつた。

「あの女はやつぱり魔ものだ。」

西岡は唸るように言つた。

三

たった一人の妹をうしなつた西岡の嘆きはひと通りでなかつた。しかし今更どうすることも出来ないので、叔父や近所の者どもが手伝つて、型の通りにお福の葬式をすませた。

「畜生。今度見つけ次第、いきなりに叩つ斬つてやる。」

西岡はかたきを探すような心持で、その後は努めて市中を出あ
るいて、かの怪しい娘に出逢うことを念じていたが、彼女は再び
その姿を見いだすことが出来なかつた。

おなじ江戸川端ではあるが、牛込寄りのほうに猪波いなみずしよ図書とい
う三百五十石取りの旗本の屋敷があつた。その隠居は漢学者で、西
岡や叔父はかれについて漢籍を学び、詩文の添削などをしてもら
つていた。隠居は采石さいせきと号して、そのころ六十以上の老人であ
つたが、今度の西岡の妹の一条についてこんな話をして聞かせた。
「その娘は他人の空似で、妹は急病で頓死、それとこれとは別々
でなんにも係合いのないことかも知れないが、妹の死ぬ朝には浅
草でその姿を見せて、その晩にも屋敷の門前にあらわれたという

ことになる、両方のあいだに何かの糸を引いているようにも思われて、西岡が魔ものだというのも一応の理屈はある。しかし世の中には意外の不思議がないとは限らない。それとは少し違う話だが、仙台藩の只野あや女じよ、後に真葛尼まくずといった人の著述で奥おうし州ゆうばなし 咄はなという随筆風の物がある。そのなかにこういう話が書いてあったように記憶している。

仙台藩中のなにかという侍が或る日外出して帰って来ると、自分の部屋の机の前に自分と同じ人が坐っている。勿論、うしろ姿ではあるが、どうも自分によく似ている。はて、不思議だと思ふ間もなく、その姿は煙りのように消えてしまった。あまり不思議でならないので、それを母に話して聞かせると、母は忌いやな顔を

して黙っていた。すると、それから三日を過ぎないうちに、その侍は不意に死んでしまった。あとで聞くと、その家は不思議な家筋で、自分で自分のすがたを見るときは死ぬと言ひ伝えられている。現になにがしの父という人も、自分のすがたを見てから二、三日の後に死んだそうだと書いてある。

わたしはそれを讀んだときに、この世の中にそんなことのある道理がない。これは何か支那の離魂病の話でも書き直したものであるうと思つていたが、今度の西岡の一件もややそれに似かよつてゐる。奥州咄の方では自分で自分のすがたを見たのであるが、今度のは兄が妹の姿をみたのである。しかも一度ならず二度も三度も見たばかりか、なんの係合もない奉公人や隣り屋敷の者ま

だがその姿を見たというのであるから、なおさら不思議な話ではないか。西岡の家にも何かそんな言い伝えでもあるかな。」

「いや、知りません。誰からもそんな話を聞いたことはございません。」と、西岡は答えた。

なるほど、その奥州咄にあるように、自分が自分のすがたを見るときは死ぬというような不思議な例があるならば、西岡の場合にもそれが当てはまらないこともない。人間の死ぬ前には、その魂がぬけ出してさまよい歩くともいうのかも知れないと、叔父は思った。そうなれば、これも一種の離魂病である。西岡の話によると、妹は五月の末頃からとかくに眠り勝ちで、昼間でも、うとうとと居眠りをしていることがしばしばあったというのである。

「あの話を采石先生から聞かされて、それからなんだかおそろしくてならない。往來をあるいていても、もしや自分に似た人に出逢いはしまいかとびくびくしている。」と、西岡はその後に叔父に話した。

しかし彼は、妹によく似たかの娘に再び出逢わなかつた。自分によく似た男にも出逢わなかつたらしい。そうして、明治の後までも無事に生きのびた。

明治二十四年の春には、東京にインフルエンザが非常に流行した。その正月に西岡は叔父のところへ年始に来て、屠蘇とそから酒になつて夜のふけるまで元氣よく話して行つた。そのときに彼は言つた。

「君も知っている通り、妹の一件のときには僕も当分はなんだか忌な心持だったが、今まで無事に生きて来て、子供たちもまず一人前になり、自分もめでたく還暦の祝いまで済ませたのだから、もういつ死んでも憾^{うら}みはないよ。はははははは。」

それから半月ほども経つと、西岡の家から突然に彼の死を報じて来た。流行のインフルエンザに罹つて五日ばかりの後に死んだというのである。その死ぬ前に自分で自分のすがたを見たかどうか叔父もまさかにそれを訊くわけにもゆかなかつた。遺族からも別にそんな話もなかつた。

青空文庫情報

底本：「異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集 其ノ二」原書房

1999（平成11）年7月2日第1刷

初出：「新小説」

1925（大正14）年7月

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

離魂病

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>